様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｈ０１０８４

研究課題名（和文）項目反応理論を利用した自閉症スペクトラム障害スクリーニングテストの開発

研究課題名（英文）A new screening test for autism spectrum disorders in toddlers using item response theory

研究代表者
中村　知靖（NAKAMURA, Tomoyasu）

九州大学・人間環境学研究院・教授

研究者番号：３０２５１６１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,100,000円

研究成果の概要（和文）：自閉症スペクトラム障害(ASD)の早期発見のため，項目反応理論を利用して3歳児向けスクリーニングテストを開発した。テストは，コミュニケーション能力と特異行動傾向を測定することが可能である。3歳児を対象に調査を実施したところ，コミュニケーション能力に関しては，定型児ならびに知的遅れのないASD児がASD児よりも能力の平均が高く，特異行動傾向に関しては，ASD児ならびに知的遅れのないASD児が定型児よりも傾向の平均が高いことが分かった。また，早期発見に基づく早期支援のため，支援対象となる本人の特性を考慮し，開発したスクリーニングテスト結果に基づく養育方針を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
自閉症スペクトラム障害(ASD)の早期発見に関しては，3歳以上の幼児に対しては親面接式自閉スペクトラム症評定尺度が利用されているが，半構造化面接のために実施時間を要し大規模なスクリーニングには向かない。本研究で開発した3歳児向けスクリーニングテストは養育者が回答する方式であるため，3歳児健診など大規模会場での実施が可能である。また，項目反応理論を利用することでテストとしての測定精度が高く，従来のテストでは見出すことが困難であった知的遅れのないASD児のスクリーニングの可能性もあり，自閉症スペクトラム障害の早期発見における新たなツールを提供した点で学術的ならびに社会的意義が大きいと考えられる。

研究成果の概要（英文）：A new screening test for autism spectrum disorders (ASD) in three-year-old children was developed using item response theory. The test can measure communication ability and specific behavioral tendencies (restricted interests or repetitive behavior). A total of 954 three-year-old children participated in the questionnaire. The result showed that the mean of communication ability scores in children with typical development and with high-functioning autism was higher than those in children with autism spectrum disorders, and the mean of specific behavioral tendencies scores in children with autism spectrum disorders and with high-functioning autism was higher than those in children with typical development. Additionally, this study also developed a nurturing policy based on the screening test results to consider the individual traits.

研究分野：教育心理学

キーワード：発達障害　コホート研究　発達支援　項目反応理論　スクリーニングテスト　自閉症スペクトラム障害　教育心理学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

自閉症スペクトラム障害（ASD）の乳幼児期からの早期発見とそれに伴う早期支援は社会的に重要な課題の一つである。早期発見のツールとして我が国では，海外で作成されたスクリーニングテストをもとに，金井・長田・小山・栗田（2004）の乳幼児行動チェックリスト改訂版（IIBC-R）や神尾・稲田（2006）ならびに Inada, Kamio, & Koyama (2010)の乳幼児期自閉症チェックリスト修正版（M-CHAT）が開発され，日本語版としての有効性について検討が行われている（武井・寺崎・野寄, 2010）。

特に M-CHAT は，一部の自治体において 18 か月児健診に利用されているが，16～30 か月児を対象として開発されたスクリーニングテストであり，項目内容から 3 歳児以降での利用は難しい。また M-CHAT は，知的遅れのない ASD 児が見落とされやすい傾向にあるとの指摘もある（中島 他, 2012）。大神（2008）は，共同注意に焦点をあて，12～18 か月児において測定精度が高いコミュニケーション能力テストを開発したが，3 歳児以降になると測定精度が低くなった。

このように，18 か月児を対象とした自閉症スペクトラム障害に関するスクリーニングテストは整備されているが，母子保健法で規定されている 3 歳児健診時に利用可能な測定精度の高いスクリーニングテストは存在しない。早期発見を継続して行うためには，3 歳児健診時でも利用可能なスクリーニングテストが必要である。また，従来のスクリーニングテストでは見落とされる傾向にある知的遅れのない ASD 児に対しても測定精度の高いスクリーニングテストの開発も急務である。

上記の早期発見とともに早期支援も自閉症スペクトラム障害に関しては重要な課題である。自閉症スペクトラム障害に関しては，症状を和らげる薬物療法の可能性は示されているが根本的な治療法は存在せず，心理的支援や介入が必要である（黒田, 2016）。特に早期発見による早期支援ならびに療育は，ASD 児の社会的発達の促進する重要な手段であり，成人後の生きがいや生活の質を高めることに大きな影響を与える（神尾, 2011）。自閉症スペクトラム障害に関わる支援は，本人への支援のみならず，家族への支援，教育的支援，社会福祉的支援も必要であり，地域社会連携を重視し，更に本人の特性に応じた支援についても検討する必要がある。

２．研究の目的

本研究では，自閉症スペクトラム障害に対する乳幼児期における早期発見を 18 か月健診以降も継続して行うことを可能とするため，項目反応理論を利用して 3 歳児を対象とする新たな精度の高いスクリーニングテストの開発を行う。その際，従来のスクリーニングテストでは困難であった知的遅れのない ASD 児の早期発見に対応したテストの開発を行う。また，早期支援に関しては，支援対象となる本人の特性を考慮するために，開発するテスト結果に基づく養育方針についても検討する。

３．研究の方法

（１）3 歳児向け自閉症スペクトラム障害スクリーニングテストの開発

調査対象者と手続き　北部九州に在住の幼児 954 名が調査に参加した。内訳は，男性 503 名，女性 451 名であり，平均月齢 38.5（SD=4.7，範囲：24-77）であった。調査は，3 歳児乳幼児健診会場，子育て支援センター，大学病院こどものこころの相談室において実施された。調査の目的や概要を保健師や医師が調査票に記載された内容に基づいて口頭にて説明した。その説明をもとに，養育者の同意を書面により得た。調査への回答は養育者が行った。本研究は，九州大学大学院人間環境学研究院人間科学部門心理学講座研究倫理委員会の承認を受けて実施された。

調査内容　DSM-5 で示されている自閉スペクトラム障害(ASD)の診断基準である「社会的コミュニケーションおよび相互関係における持続的障害」と「限定された反復する様式の行動，興味，活動」の 2 つの側面を考慮し，コミュニケーション能力に関する 10 項目，特異行動傾向に関する 4 項目を作成した。コミュニケーション能力に関しては，大神（2008）の 18 か月向けコミュニケーション能力テストの項目を一部含めた。養育者は，項目に示された内容に自分の子どもが当てはまるかどうかを「はい」，「いいえ」の 2 件法で回答した。

（２）スクリーニングテストに基づいた養育方針の策定

（1）で作成したスクリーニングテストにおいて，コミュニケーション能力が低いという結果が示された場合や特異行動傾向が高いという結果が示された場合に，どのような養育あるいは支援を行うことが適切かについて，スクリーニングテストの項目内容や ASD と判定を受けた対象者の各項目への反応やコミュニケーション能力や特異反応傾向の得点を基に方針を策定した。

４．研究成果

（１）3 歳児向け自閉症スペクトラム障害スクリーニングテストの開発

コミュニケーション能力ならびに特異反応傾向のそれぞれに関して，四分相関行列をもとに

因子分析を行い，固有値の変化をもとに１次元性を確認した。１次元性の確認には TESTFACT を利用した。その後，項目反応理論の２パラメタロジスティックモデルを用いて，コミュニケーション能力と特異反応傾向別に項目パラメタを求めた。項目パラメタの算出には BILOG-MG を利用した。

コミュニケーション能力に関しては通過率が 98%以上と高い項目や項目パラメタの推定値の標準誤差が大きい項目を削除し分析したところ，表１のような結果が得られた。項目反応理論によってコミュニケーション能力を測定可能となった項目パラメタを見ると，困難度がマイナスの値を取り，識別力が１以上と高いことを考えると，コミュニケーション能力の低い３歳児に対して高い精度で測定可能なテストになっていることが分かる。逆に，コミュニケーション能力の高い 3 歳児に対しては精度が低くなる。コミュニケーション能力に関わる項目に関しては全体的に通過率が高く，項目反応理論を適用可能な項目数が少なく，3 歳児時点でのコミュニケーション能力を幅広く捉えることの必要性の是非も踏まえて，項目について再検討することも必要である。また，コミュニケーション能力は，経年的な変化を捉えることが重要であり，１歳半児時点からの変化を踏まえたスクリーニングを検討する必要がある。

表１　コミュニケーション能力に関する識別力と困難度

項目	項目内容	識別力	困難度
A2	視線が合いにくいと感じることがありますか（逆転項目）	1.141	-2.190
A6	誰かがけがをしたり，おなかや頭が痛いとき，その人の顔を心配そうに見ることがありますか	1.727	-2.272
A8	他の子どもに感心がありますか	1.889	-2.302
A9	絵本を見て「これ何？」と聞くと，３つ以上の名前を答えられますか	1.824	-2.302
A10	会話が続きますか	2.132	-1.623

特異行動傾向に関しては，表 2 をみると分かるように，予め想定された 4 つの項目すべてで識別力ならびに困難度を求めることができており，項目反応理論による特異行動傾向を測定可能であることが分かる。すべての項目において識別力が 0.7 以上と比較的高い値を示しており，困難度が全体的に高いことを考えると，特異行動傾向が高い 3 歳児に対して高い精度で測定可能なテストになっていることが分かる。ただし，項目数が少ないので，測定精度の面を考慮すると今後，項目数を増やす必要がある。

表 2　特異行動傾向に関する分析結果

項目	項目内容	識別力	困難度
A11	一方通行に自分の言いたいことだけをいいますか	0.986	1.256
A12	普段通りの状況や手順が急に変わると，混乱しますか	0.793	1.829
A13	聞かれたことをオウム返しの応答が目立ちますか	1.100	2.040
A14	手をたたく，ひらひらさせる，ジャンプするなどの同じ動作を繰り返しますか	0.752	0.698

表 3 はこれまで見てきたコミュニケーション能力と特異行動傾向に関して，定型児と ASD 児の平均などを示したものである。定型児と ASD 児のコミュニケーション能力の平均を比べると，明らかに ASD 児の値が低く，コミュニケーション能力の観点から定型児と ASD 児をスクリーニングすることが可能であると判断できる。ただし，サンプルサイズが小さいため明確なことはいえないが，知的遅れのない ASD 児に関しては，能力値の平均が定型児と変わらない可能性があり，コミュニケーション能力の観点からだけでは，定型児と知的遅れのない ASD 児をスクリーニングすることは困難であることが分かる。

表 3　定型児と ASD 児の能力値

群	N	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力平均	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力 SD	特異行動傾向平均	特異行動傾向 SD
定型児	916	.038	.504	-.031	.640
ASD 児	23	-1.300	1.077	.840	.891
知的遅れのない ASD 児	2	.198	.000	.907	.734
その他	13	-1.021	1.048	.677	.805
全体	954	-.009	.584	.002	.668

次に，特異行動傾向に関しては，定型児と比べ，ASD 児ならびに知的遅れのない ASD 児におい

て値が高いことが分かる。このことから，特異行動傾向の観点から定型児と ASD 児ならびに知的遅れのない ASD 児をスクリーニングすることが可能かもしれない。少なくとも定型児と ASD 児とのスクリーニングは可能だが，今回，知的遅れのない ASD 児のサンプルサイズが小さいので確実な判断をすることはできない。また，現時点でのデータでは，ASD 児や知的遅れのない ASD 児に関しては，年齢が定型児と比べてやや高い傾向にある。今後，ASD 児や知的遅れのない ASD 児に関しても定型児と年齢が揃ったデータを収集し，最終的に，スクリーニングの基準（カットオフポイント）を決めていく必要がある。

（2）スクリーニングテストに基づいた養育方針の策定

スクリーニングテストの項目内容や ASD と判定を受けた対象者の各項目への反応やコミュニケーション能力や特異反応傾向の得点を基に方針を策定した。表 4 が，その結果をまとめたものである。今後，今回策定した養育方針をもとに，テスト結果に基づいた養育あるいは支援の実施が必要であると考える。

表 4　測定領域別養育方針

測定領域	養育内容
コミュニケーション能力が低い場合	・ 距離を調整したり，名前の呼びかけに抑揚をつけたり，身体接触を伴う関わりをする ・ 興味を持ちそうなものとの距離を離しておき，指さしが出やすいような環境を設定する ・ まずは図鑑や絵本などを用いて，その子の興味や知識がある対象で，「○○はどこ？」と応答の指さしを引き出す ・ 表情だけでは分かりにくいこともあるため，「痛い」「苦しい」などを，明確に言語化するなどして伝える ・ 大人が身近でモデルを見せる ・ 他者の苦痛へ気づいたり，慰め行動をしたりした第三者を褒めて（絵本などを用いても可），代理強化する ・ 声かけで視線を他者に促してみる ・ 同じようなタイプの子ども２，３人でのペア療育をし，準備する玩具を制限し，軽い”取り合い”が起こるような（他児を意識せざるを得ない）状況を設定する ・ 子どもが絵本を読んで（めくって）いる時に，大人側から「○○があるね」「○○が□□してるね」などの声かけをする（文章を読むわけではなく） ・ 大人側が故意に聞き間違えをしたり，言い直し間違えをしたりする（子どもがそれに気づいて訂正したり，言い換えをしたりすると会話のターンが増える）
特異行動傾向が高い場合	・ 絵カードなどの視覚刺激で話す・聞くの順番を提示する ・ 大人側が故意に聞き間違えをしたり，言い直し間違えをしたりする（子どもに言い直しの機会をあたえることで一方向性が多少軽減される） ・ 変更がある時は，事前に予告をしておき，気持ちの準備をさせる ・ 遊びの中で，子どもがやりたい方向性に合わせるだけでなく，大人側が少し変更を提案したり（「○○をやってみたいな」など），故意の失敗など“子どもの思いどおりにならないこと”を少ししてみたりして，変化があっても楽しめるということを体感させる ・ INREAL アプローチのリフレクティングングやエクシパンションを行い，無理に言い直しさせることはしない ・ 不安から来る行動なので止めさせるというようなことは逆効果で，指先の感覚刺激（柔らかいものを握る）などの“目立たない行動”に置き換える

＜引用文献＞

Inada, N., Kamio, Y., & Koyama, T. (2010). Developmental chronology of preverbal social behaviors in infancy using the M-CHAT: Baseline for early detection of atypical social development. *Research in Autism Spectrum Disorders*, **4**, 605-611.

神尾陽子 (2011). 自閉症スペクトラム障害の早期発見をめぐって 教育と医学，**59**，49-57.

神尾陽子・稲田尚子 (2006). 1歳6か月健診における広汎性発達障害の早期発見についての予備的研究　精神医学，**48**，981-990.

金井智恵子・長田洋和・小山智典・栗田広（2004）．広汎性発達障害スクリーニング尺度としての乳幼児行動チェックリスト改訂版（IBC-R）の有用性の検討　臨床精神医学，**33**，313-321．
黒田美保（2016）．発達障害アセスメントから支援，その実際 臨床心理学，**16**，136-140．
中島俊思・伊藤大幸・大西将史・高柳伸哉・大嶽さと子・染木史緒・望月 直人・野田航・林陽子・瀬野由衣・辻井正次（2012）．3 歳児健診おける広汎性発達障害児早期発見のためのスクリーニングツール PARS 短縮版導入の試み 精神医学，**54**，911-914．
大神英裕（2008）．発達障害の早期支援―研究と実践を紡ぐ新しい地域連携　ミネルヴァ書房．
武井祐子，寺崎正治，野寄尚子（2010）．広汎性発達障害児の社会性スクリーニング検査の課題－養育者と専門家の評価の違い－　川崎医療福祉学会誌，**20**，179－187．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計16件（うち査読付論文　10件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Wang Yangyang、Nakamura Tomoyasu、Sanefuji Wakako	４．巻 37
２．論文標題 The influence of parental rearing styles on university students’ critical thinking dispositions: The mediating role of self-esteem	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Thinking Skills and Creativity	６．最初と最後の頁 100679～100679
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.tsc.2020.100679	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 MIYOSHI Mio、SANEFUJI Wakako	４．巻 62
２．論文標題 YOUNG CHILDREN’S SELECTIVE TRUST: DOES SEEING INDICATE KNOWING?	５．発行年 2020年
３．雑誌名 PSYCHOLOGIA	６．最初と最後の頁 197～205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2117/psysoc.2019-A011	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山下 洋	４．巻 29
２．論文標題 母子と家族のための乳幼児臨床	５．発行年 2020年
３．雑誌名 乳幼児医学・心理学研究	６．最初と最後の頁 3-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Katsuki Daisuke、Yamashita Hiroshi、Yamane Kenichi、Kanba Shigenobu、Yoshida Keiko	４．巻 51
２．論文標題 Clinical Subtypes in Children with Attention-Deficit Hyperactivity Disorder According to Their Child Behavior Checklist Profile	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Child Psychiatry & Human Development	６．最初と最後の頁 969～977
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s10578-020-00977-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yamashita Hiroshi、Yamane Kenichi、Katsuki Daisuke、Yoshida Keiko	4．巻 -
2．論文標題 Parental Health and Early Child Development	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Mental Health and Illness of Children and Adolescents	6．最初と最後の頁 1～13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/978-981-10-0753-8_27-1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yamane Kenichi、Yamashita Hiroshi、Katsuki Daisuke、Yoshida Keiko	4．巻 -
2．論文標題 Parents with Psychiatric Conditions	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Mental Health and Illness of Children and Adolescents	6．最初と最後の頁 1～13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/978-981-10-0753-8_24-1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山下 洋	4．巻 68
2．論文標題 周産期メンタルヘルスにおけるアタッチメントの意義と限界	5．発行年 2020年
3．雑誌名 教育と医学	6．最初と最後の頁 20-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山下 洋	4．巻 97
2．論文標題 発達障害	5．発行年 2020年
3．雑誌名 臨床と研究	6．最初と最後の頁 69-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山下 洋	４．巻 61
２．論文標題 発達的視点からみたアタッチメントとトラウマ	５．発行年 2020年
３．雑誌名 児童青年精神医学とその近接領域	６．最初と最後の頁 2-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋登・中村知靖	４．巻 31
２．論文標題 日本語の音韻意識は平仮名の読みの前提であるだけなのか：ATLAN音韻意識検査の開発とその適用から	５．発行年 2020年
３．雑誌名 発達心理学研究	６．最初と最後の頁 37-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中村知靖	４．巻 57
２．論文標題 探索的因子分析と確認的因子分析の活用	５．発行年 2018年
３．雑誌名 児童心理学の進歩	６．最初と最後の頁 261-282
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Sanefuji Wakako、Haryu Etsuko	４．巻 9
２．論文標題 Preschoolers’ Development of Theory of Mind: The Contribution of Understanding Psychological Causality in Stories	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Frontiers in Psychology	６．最初と最後の頁 324-328
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpsyg.2018.00955	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yamaguchi Sayoko、Sanefuji Wakako	4．巻 179
2．論文標題 Children's Other-Oriented Behaviors in Distress Situations	5．発行年 2018年
3．雑誌名 The Journal of Genetic Psychology	6．最初と最後の頁 324-328
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/00221325.2018.1499606	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山下 洋	4．巻 4
2．論文標題 周産期ハイリスク事例への心理社会介入－愛着形成の視点から－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本周産期メンタルヘルス学会会誌	6．最初と最後の頁 31-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山下　洋、鈴宮寛子、吉田敬子	4．巻 27
2．論文標題 周産期メンタルヘルスと母子保健－いま地域保健師に期待される役割－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 乳幼児医学・心理学研究	6．最初と最後の頁 95-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山下 洋	4．巻 33
2．論文標題 不安症と双極性障害，自閉スペクトラム症の合併 分離不安症と自閉スペクトラム症	5．発行年 2018年
3．雑誌名 精神科	6．最初と最後の頁 458-462
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計17件（うち招待講演　1件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 中村 知靖・大神 英裕・実藤 和佳子・山下 洋
2．発表標題 3歳児向け自閉症スペクトラム障害スクリーニングテストの開発
3．学会等名 日本心理学会第84回大会
4．発表年 2020年

1．発表者名 山下洋
2．発表標題 発達の予兆を読む－親子の関係性から占う赤ちゃんの未来－
3．学会等名 日本赤ちゃん学会第20回学術集会
4．発表年 2020年

1．発表者名 Hiroshi Yamashita, Shinichi Hoshi, Mariko Iwayama, Junko Kihara, Shunji Suzuki, Yoshiyuki Tachibana
2．発表標題 Accelerating Dissemination of Perinatal Mental Health in Japan
3．学会等名 2020 International Marce Society Conference（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 香月大輔、高田加奈子、松本美菜子、山根謙一、山下洋
2．発表標題 神経発達症の児童の保護者を対象とした短縮型ペアレント・トレーニングのランダム化待機コントロール比較対象研究
3．学会等名 第61回日本児童青年精神医学会総会
4．発表年 2020年

１．発表者名 山下 洋
２．発表標題 親子2世代のトラウマ関連障害への対応 アタッチメントに基づく介入と親子相互交流への介入プログラム
３．学会等名 第11回集団認知行動療法研究会学術総会
４．発表年 2020年

１．発表者名 谷口雄紀・実藤和佳子
２．発表標題 大人は幼児よりも非効率的に模倣をする―行為の種類が overimitationに与える影響―
３．学会等名 九州心理学会第80回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 実藤和佳子
２．発表標題 子どもの発達特性のアセスメント：自閉症スペクトラム障害に焦点 を当てて（シンポジウム「障害のある子どものアセスメント～支援の基盤としての子 どもの実態把握～」）
３．学会等名 九州心理学会第80回大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中村知靖
２．発表標題 人生の発達と語り直し　質的データと量的データの統合
３．学会等名 日本教育心理学会第60回総会
４．発表年 2018年

１．発表者名 島袋恒男，中村知靖，中尾達馬
２．発表標題 小・大連携を通した授業改善による児童の学びの縦断的研究
３．学会等名 日本教育心理学会第60回総会
４．発表年 2018年

１．発表者名 高橋登，中村知靖
２．発表標題 ATLAN音韻意識検査の開発
３．学会等名 日本教育心理学会第60回総会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中村知靖
２．発表標題 成人期女性の語り直し　発達軌跡からのアプローチ
３．学会等名 日本発達心理学会第30回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Taniguchi, Y., & Sanefuji, W.
２．発表標題 The effect of the types of irrelevant action on overimitation in humans
３．学会等名 The 4th World Social Science Forum（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 谷口雄紀・実藤和佳子
２．発表標題 Goal demotionはoverimitationに影響するのか
３．学会等名 日本発達心理学会第30回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Taniguchi, Y., & Sanefuji, W.
２．発表標題 The Effect of the Functional Action on Children’s Overimitation
３．学会等名 The 2019 SRCD Biennial Meeting（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Taniguchi, Y., & Sanefuji, W.
２．発表標題 Children Tend to Overimitate the Goal-Demoted Action
３．学会等名 The 2019 SRCD Biennial Meeting（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hiroshi Yamashita, Keiko Yoshida
２．発表標題 Raising Adolescent Parents-From the perspective of perinatal mental health-
３．学会等名 2nd Regional Meeting of international Society for Adolescent Psychiatry and Psychology（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hiroshi Yamashita, Keiko Yoshida
２．発表標題 Longitudinal Study of postpartum bonding disorder and its perinatal correlate in Japanese mother
３．学会等名 World Association for Infant Mental Health 16th World Congress（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

１．著者名 子安 増生、丹野 義彦、箱田 裕司 （中村知靖：編集委員，項目執筆）	４．発行年 2021年
２．出版社 有斐閣	５．総ページ数 1002
３．書名 有斐閣 現代心理学辞典	

１．著者名 加藤 隆弘、神庭 重信 （山根 謙一，山下 洋：分担執筆）	４．発行年 2020年
２．出版社 遠見書房	５．総ページ数 280
３．書名 精神疾患とその治療 第9章 精神発達症群(発達障害) pp.135-148	

１．著者名 水口 雅 （山下 洋：分担執筆）	４．発行年 2020年
２．出版社 医学書院	５．総ページ数 1010
３．書名 今日の小児治療指針 第17版　摂食障害　pp.699-700	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	山下　洋 (YAMASHITA Hiroshi) (20253403)	九州大学・大学病院・学術研究員 (17102)	
研究分担者	實藤　和佳子 (SANEFUJI Wakako) (60551752)	九州大学・人間環境学研究院・准教授 (17102)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関